

No.9 A WORD FROM ANOTHER WORLD



Travels

Karin Strom

As a child, I would spend hours flipping through the colorful pages of travel books and adventure stories. Rarely taking the time to read the text, I preferred to feast my eyes on(*) the illustrations, imagining I was right there in them. I could stare into the sparkling blue vista of a sea illustration and within moments I could feel the sea foam tickling my toes.

One of the most captivating images of my childhood was that of the geographical world. In my home, we had a large world map and a spinning globe. I loved to stare at the map and imagine life in exotic corners of the world. As I grew, these simple imaginings grew into a desire to travel. Since my childhood, I have had the opportunity to travel to several regions of America and South Africa.

July is a popular time to travel in the U.S. and I will carry on that tradition here in Japan. This month, two of my sisters and my brother-in-law will come to visit and travel with me. We will tour around Higashikawa for a couple days and then continue our adventures into Osaka, Kyoto and Tokyo. I am excited to see traditional places of Japan and explore such cultural hubs.

旅

子供の時は、何時間も旅行ガイドや冒険ものの本のカラフルなページをめくって過ごしたものです。文字はほとんど追わず、イラストを見て、そこにいる自分を空想して楽しみました(*)。きらめく青い海の絵をじっと見つめると、次の瞬間には泡立つ波が自分の足もとをくすぐる感じがしました。

子供のころ、一番引かれたものの中に地理の世界がありました。家には大きな世界地図と地球儀がありました。地図をじっとながめて、異国のどこかでの暮らしを夢みるのが大好きでした。長じて、こんな夢が実際の旅への願望となりました。子供の時から、米国や南アフリカのいくつかの地域に旅する機会がありました。

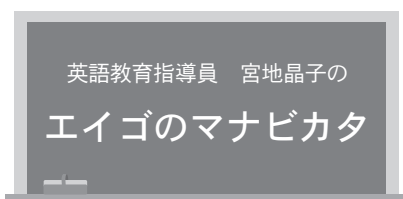
米国では7月に旅をする人が多い。その伝統を日本でも引き継ごうと思います。今月、姉2人と義兄が来日する予定で、一緒に旅行する予定です。数日は東川近辺を見て回り、そのまま大阪、京都、東京へと繰り出す予定です。日本でも伝統があり、文化の中心地を探索することに期待が膨らんでいます。

カリン ストロム

【ちょっと豆知識】

宮地晶子

文中に※「feast my eyes on」という表現が出てきました。feastといえば「祝宴」「ごちそう」という意味ですが、ここでは動詞で「(美しいものを見て)目を楽ませる」という意味。他にも「目が釘づけ」という表現もありますが、こちらは英語では釘ではなく「have one's eyes glued to」(「glue=のりづけされる」といいます。



第88回

Ideas worth spreading (心揺さぶるメッセージ)

ジル・ボルト・テイラー博士(米国インディアナ州インディアナ医科大学神経解剖学者)をご存じですか。脳神経科学の第一人者です。

彼女は37歳の時大変な体験をしました。朝起きて異変を感じ、徐々に体が動かなくなっていく…。左脳に大量出血を起こしていたのです。右腕が動かなくなると、その時初めて脳卒中だと自覚しました。

「助けを求めよう」と思う一方で、「専門家として自分が脳卒中を体験できるなんて、なんてクールなの!脳の内側から研究できるわ!」と思う強い精神の持ち主です。やっとの思いで助けを求めて大手術を受け、8年間に渡

るリハビリの末復活します。その体験をライブで語る映像がインターネットで見られます。「TED—Ideas worth spreading (広める価値のあるアイデア)」というサイトです。

彼女が体験したのは、細かく指示を出してくる左脳がまひしてしまい、右脳だけが働く状態。右脳は元々「いま」「ここ」にしか関心がない。自他の区別もなくなって、宇宙と一体化したような幸福感に見舞われる。その話がとにかくおもしろく力強い。これをぜひ英語でみてください。

この講演は記録的なアクセス数で、当時テイラー博士は、米国の雑誌、タイム誌の「2008年世界で最も影響力のある100人」に選ばれました。「TED」のすごいところは、グーグルの創業者、ハリーポッターの著者、米国大統領など、強いメッセージを持ったありとあらゆる人々の映像を無料で見られることです。

英語のスク립ト(原稿)もありますし、日本語訳がついているものもあります。ぜひ一度ご覧ください。

書籍「My stroke of insight. (奇跡の脳)」が4月に新潮社から文庫化(新潮文庫)され、気軽に読めるようになりました。脳卒中の人の気持ちが詳しく書かれています。解説は養老孟司氏と茂木健一郎氏です。

(訳:宮地晶子)